日本教育心理学会 第66回総会
学会企画シンポジウム 3

教員による子どもへの暴力はなぜなくならないのか
――ことばの暴力や心理的暴力を視野に入れて――

資料目次（PDFのページ）

◆ 企画趣旨の説明

尾見康博　2～7

◆ 話題提供

渋倉崇行　8～18

大対香奈子　19～42

西田公昭　43～56

教員による子どもへの暴力はなぜなくならないのか

―ことばの暴力や心理的暴力を視野に入れて―

学会企画委員会シンポジウム3

佐藤有耕・尾見康博

話題提供

- 渋倉崇行 （桐蔭横浜大学）
  - コーチ育成の立場から
- 大対香奈子（近畿大学）
  - 行動分析学の立場から
- 西田公昭♯ （立正大学）
  - マインド・コントロールの立場から

指定討論

- 鹿毛雅治（慶應義塾大学）
  - 教員養成や動機づけなど広い視点から

- 尾見康博 （山梨大学）
  - 部活の文化心理学の立場から

問いはきわめてシンプル

- なぜ「教員」が，いけないことだとわかっていながら，子どもに暴力を振るうのか？

- それとも，わかっていないのか？

「体罰」なら許されるのか？

- 2022 年度に子どもへの体罰で懲戒処分などを受けた公立学校教員の数は2013 年度以降初めて増加に転じた（文部科学省，2023）。
- いぜんとして一定程度の教員が体罰に無自覚，あるいは体罰を肯定していると考えざるを得ない。
- 「セクハラ罪という罪はない」と同じ匂い？

「暴力」なら目が向くのか？

- 教員によることばの暴力や心理的暴力にあまり目が向けられていない背景とは？
- 日本の教員を取り巻く環境との関連は？
- 課外活動の研修はありうる？
  - 「特に，生徒の自主的，自発的な参加により行われる部活動については，スポーツや文化，科学等に親しませ，学習意欲の向上や責任感，連帯感の涵養等，学校教育が目指す資質・能力の育成に資するものであり，学校教育の一環として，教育課程との関連が図られるよう留意すること。」

日本教育心理学会第66回（2024年）総会
学会企画シンポジウム3
教員による子供への暴力はなぜなくならないのか
ーことばの暴力や心理的暴力を視野に入れてー

コーチ育成の立場から

桐蔭横浜大学大学院
渋倉　崇行

渋倉　崇行

桐蔭横浜大学大学院スポーツ科学研究科　教授
一般社団法人スポーツフォーキッズジャパン代表

専門：スポーツ心理学
種目：野球
活動：日本スポーツ協会コーチデベロッパー
日本スポーツ少年団指導育成部会部会員
全日本軟式野球連盟指導部会外部委員

◆ねらい

◇なぜ，コーチは暴力を行うのか？

コーチの役割
コーチのスポーツ観
グッドコーチの育成に向けて

◇コーチに着目する理由

コーチと選手との間に「指導する－指導される」という関係性がある
運動部活動の指導者（コーチ）を教員が務めることが多い

↓

教員による子供への暴力を理解する一助となる

◆コーチはどのような存在なのか？

◇コーチを理解する

スポーツの意義とは何か？

プレーヤー（選手）はどのような存在か？

コーチの役割とは何か？

◆コーチの指導を巡る問題

◇暴力・ハラスメントの報告が絶えない

◇暴力・ハラスメントがプレーヤーである子供に及ぼす影響

・抑うつ・不安
・自己肯定感の低下
・傷害・生命の危機
・対人関係への不安
・パーソナリティ形成
・学業成績の低下
・競技力の低下
・スポーツからの離脱

↓

身体的，精神的，社会的な側面から多くの悪影響をもたらす

◆どうすればコーチの暴力行為がなくなるのか？

スポーツ指導における問題としてのコーチの暴力行為

↓

子供にスポーツの価値に触れさせることを阻むもの

◇ スポーツ指導はコーチが有するスポーツ観の影響を多く受ける

（スポーツ観）		（スポーツ指導）
勝利至上主義	→	厳しい批判やプレッシャー
選手の成長重視	→	結果よりもプロセスを評価
他にも例えば. . .		*指導スタイル* *コミュニケーションや関係性* *動機づけ. . .*

◆コーチのスポーツ観はどのようにして形成されるのか？

◇スポーツ観の形成過程

選手時代の経験（蹴られ殴られ理不尽なことにも耐えながら．．．）
教育やトレーニング（正しい知識の入手）
自らの指導経験（試行錯誤を含む内省）．．．

↓

スポーツ観の再構成のためにはコーチの内省がカギ！

◇研修が内省に及ぼす効果

スポーツやスポーツ指導に対する正しい知識を得る
批判的思考能力を得る
内省の機会を提供する

↓

研修会を行う際の目的！

◆グッドコーチの育成に向けて（1）

◇スポーツの価値を問うということ

「コーチのスポーツ観の再構成において内省は重要である」

何が内省の際の基準や指針となるのか？
スポーツの社会的価値
↓
社会的価値を見出そうとする試みは大切である！

内省のプロセスではスポーツに対する価値意識を問うことにもなる
↓
スポーツの価値を問うことの重要性！

◆グッドコーチの育成に向けて（2）

2012年12月，高校運動部員が顧問教諭からの暴力を受けて自死する

「研究だけ行っていてもスポーツはよくならないんだ．．．」

自分は何もできていないのではないか？

役立つ研究とはなんだ？

◆「実践に役立つ研究」の過程と研究者－実践者間の協働関係

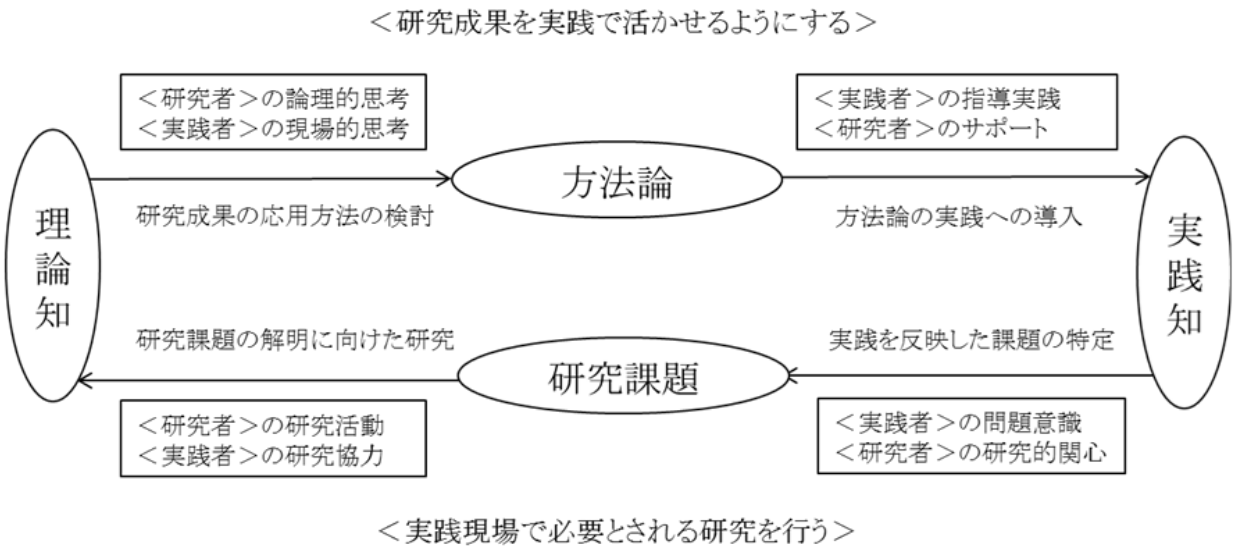


図 「実践に役立つ研究」の過程と研究者－実践者間の協働関係

渋倉崇行(2013)実践に役立つ研究とは:研究者と実践者の協働関係. スポーツ心理学研究. 40, 201-209.

実践現場にとって有意義な研究課題を導く
実践現場に役立つ方法論としてわかりやすく伝える
↓
研究と現場をつなぐ中間的な役割が必要！

◆コーチ育成に関わる活動の紹介

一般社団法人スポーツフォーキッズジャパンの設立（2014年）

活動目的　コーチの資質能力の向上
活動内容　研修機会の提供
研修内容　グッドコーチに求められる資質能力のうち特に「人間力」
研修方法　講義とワーク（経験学習）

◇講義
実践現場にとって役立つ理論知をわかりやすく伝える

◇ワーク（経験学習）
内省の機会を提供する
自己教育力を高める

↓

自立的コーチの育成

行動分析学の立場から

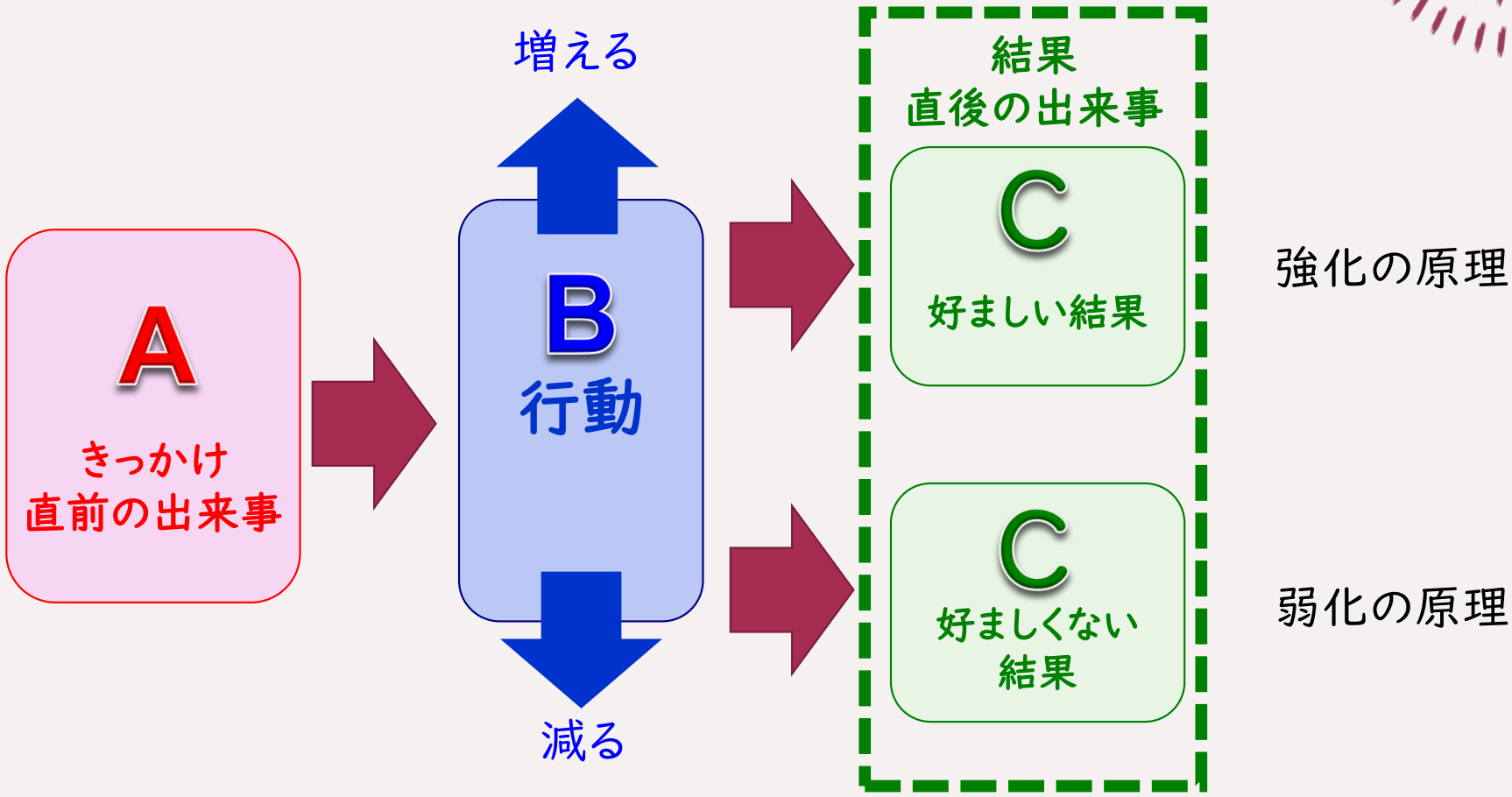
近畿大学　大対香奈子

なぜ教員が暴力をしてしまうのか

- ✓ 教師としての資質に欠けるから？
- ✓ アンガーマネジメントができないから？

個人攻撃の罠

行動が増える・減る原理


A
きっかけ
直前の出来事
B
行動
増える
減る
結果
直後の出来事
C
好ましい結果
C
好ましくない
結果
強化の原理
弱化の原理

弱化の原理を使って問題行動を減らす

弱化

ペナルティによるコントロール

正の弱化

体罰・叱責

負の弱化

ここでは「暴力」を問題行動への嫌悪的対応と広くとらえてみます

教師にとってしてほしくない行動に着目した働きかけ

子どもを心理的・身体的に傷つける行為

よくある管理型の指導・しつけ

きつく注意する･叱る

より厳しいルールを作り管理する

問題行動を起こさないよう監視する

実は教育的な指導効果は
それほど高くない

こんな副作用も･･･

その時だけ反省したふりをする（一時的）

特定の場面や叱る人の前だけかしこく振る舞う（場面限定的）

攻撃性や不安などの情動反応を引き起こす

そのうち慣れてきて効かなくなる

嘘をついたりごまかしたり，隠れてすることが増えてしまう

「体罰に反対する声明」（日本行動分析学会，2014）参照

「叱る」行動は強化されやすい

A

教室で子ども
が騒ぐ

B

叱る

C

子どもが静かになる
処罰感情の充足

即効性や報酬系回路の活性化があるために「叱る」ことが増える

「叱る」がなくならないその他の要因

- 叱らずに指導するという行動レパートリーがない
- 褒める指導が強化されにくい環境がある
- 褒める＝甘やかす、子どもになめられるという信念が根強くある（ルール支配行動）
- 叱ること、厳しく指導することを正当化する学校文化がある

体罰根絶に向けた取組の徹底について

（文部科学省, 2013）

1. 体罰の未然防止

- 体罰の禁止（体罰は禁止されていること、何が体罰にあたるかの研修）
- 組織的な指導体制の確立と指導力の向上
- 部活動指導における体罰防止の取組

2. 徹底した実態把握と早期対応

- 体罰の実態把握
- 報告および相談の徹底
- 事案に応じた厳正な処分等

3. 再発防止（研修等）

体罰を禁止するという方針
体罰事案に対する事後対応が中心

↓

体罰以外の方法で
どう指導すべきかが示されていない

現在の取組では解決しないわけ

A

体罰を禁止する
方針の提示

研修の実施

B

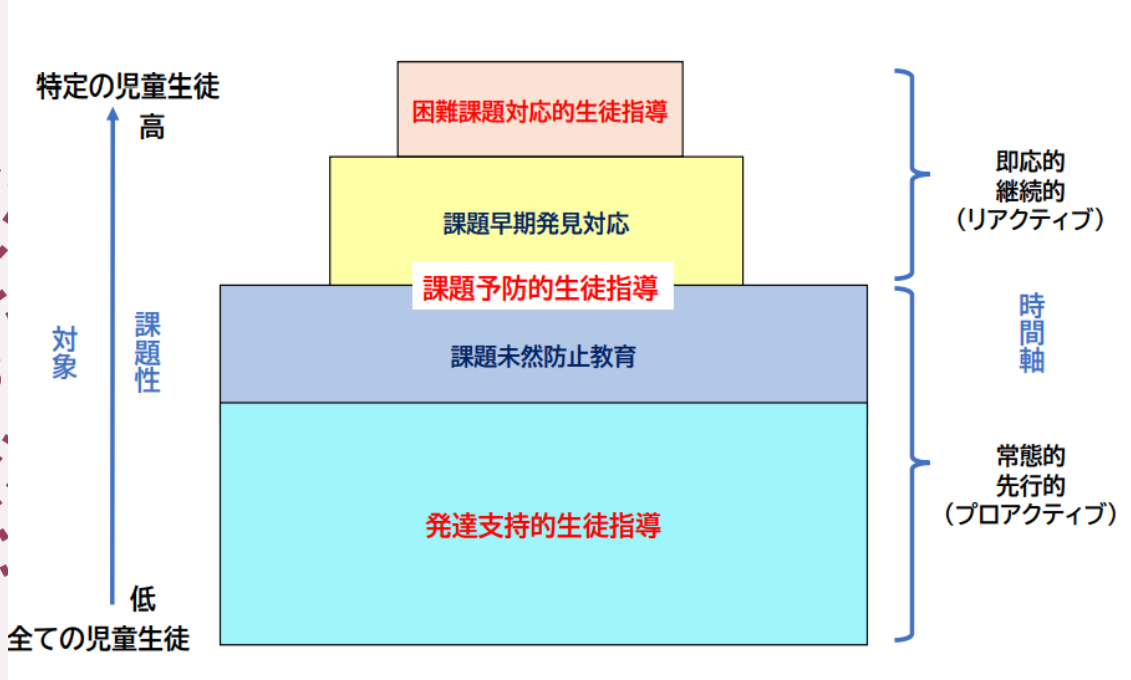
C

子どもの問題行動の改善

叱る・体罰以外の方法で効果的に指導する行動を獲得する必要性

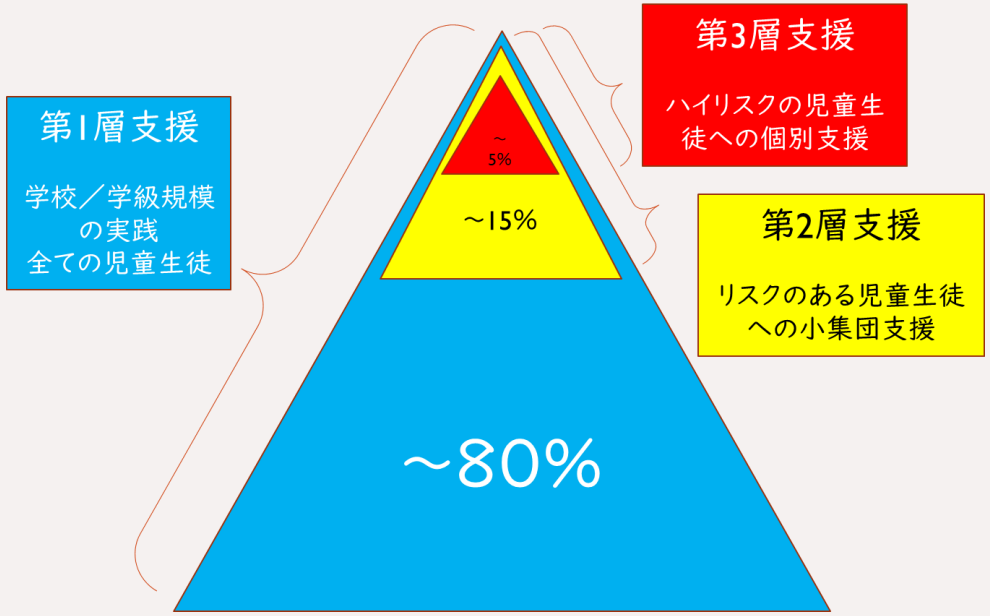
正の強化を中心とした
ポジティブ行動支援
による指導

問題解決から予防的対応へ



生徒指導の重層的支援構造

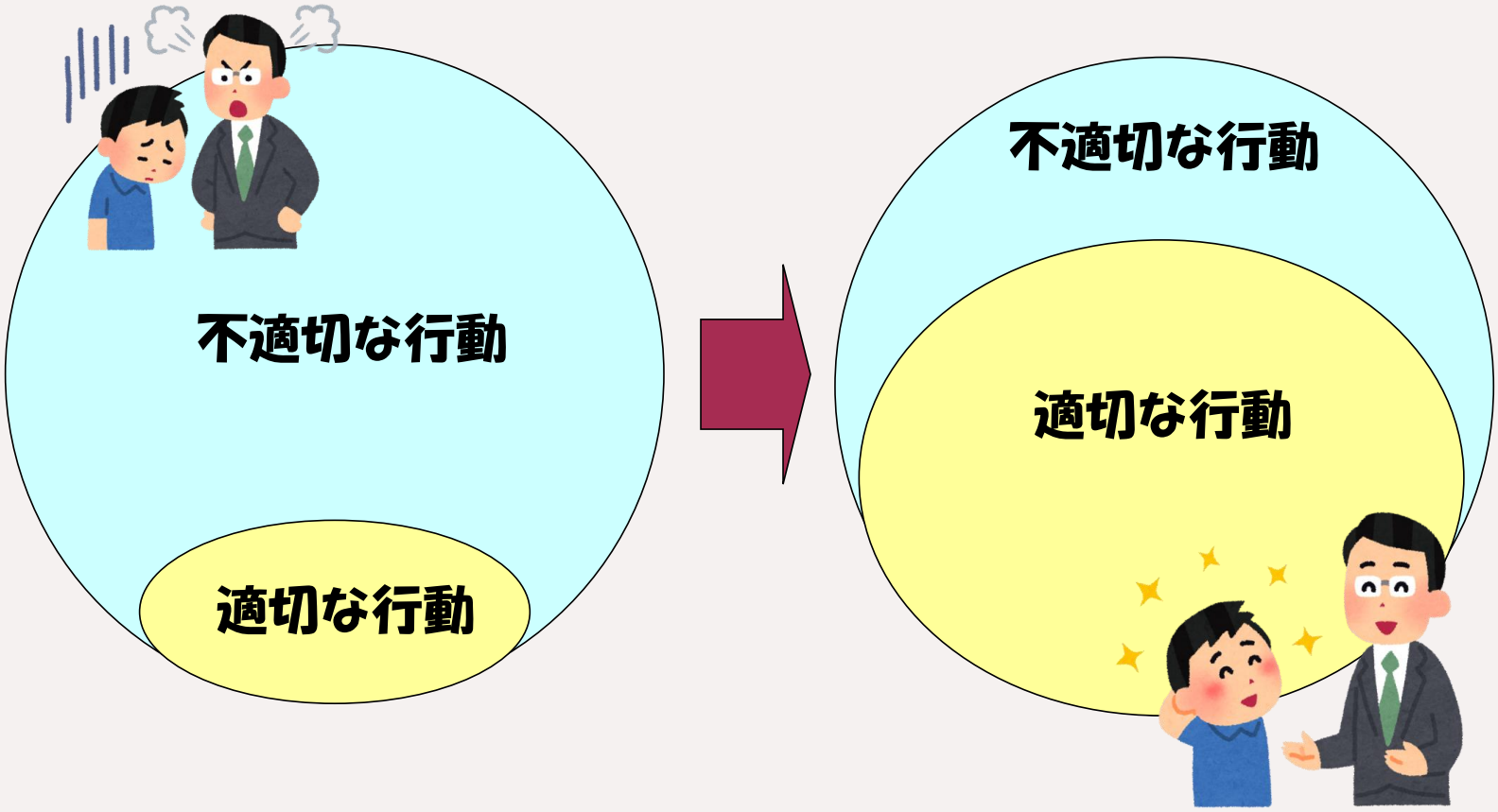
（文部科学省, 2022）



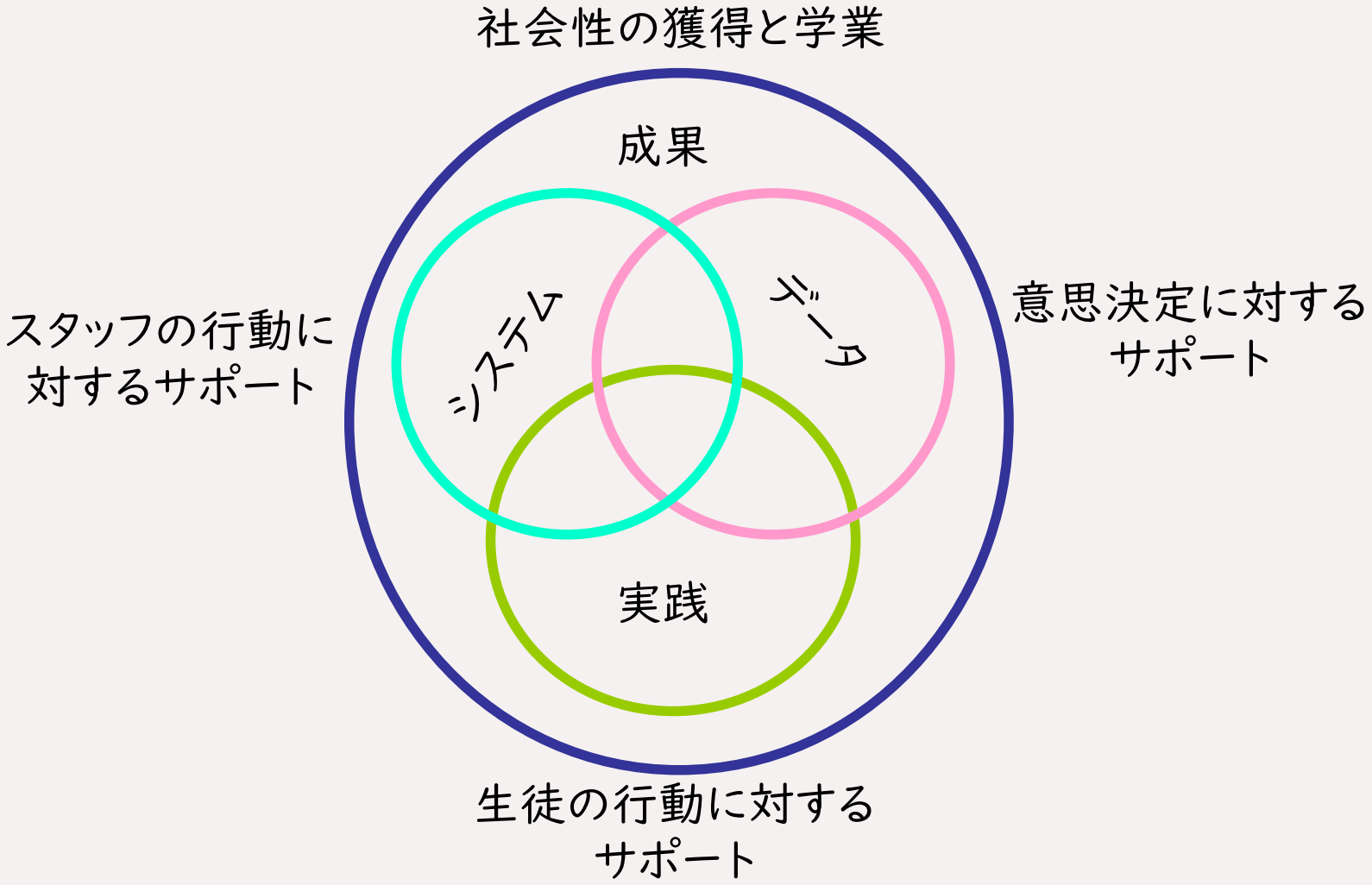
SWPBSの三層支援モデル

（Horner & Sugai, 2015を参考に作成）

PBSでは適切な行動を増やすことに注目



SWPBSの重要な４つの要素 （Sugai et al, 2010を参考に作成）



適切な行動が育つ環境を作る

B

行動を
引き出す工夫

適切な
行動

行動を
強化する工夫

例）具体的な指示
お手本を見せる
相手に合った
課題・作業を与える
明確な目標を設定する

例）褒める
注目する
ポイントを与える
特権を与える
成果を分かるように示す

Bの実践

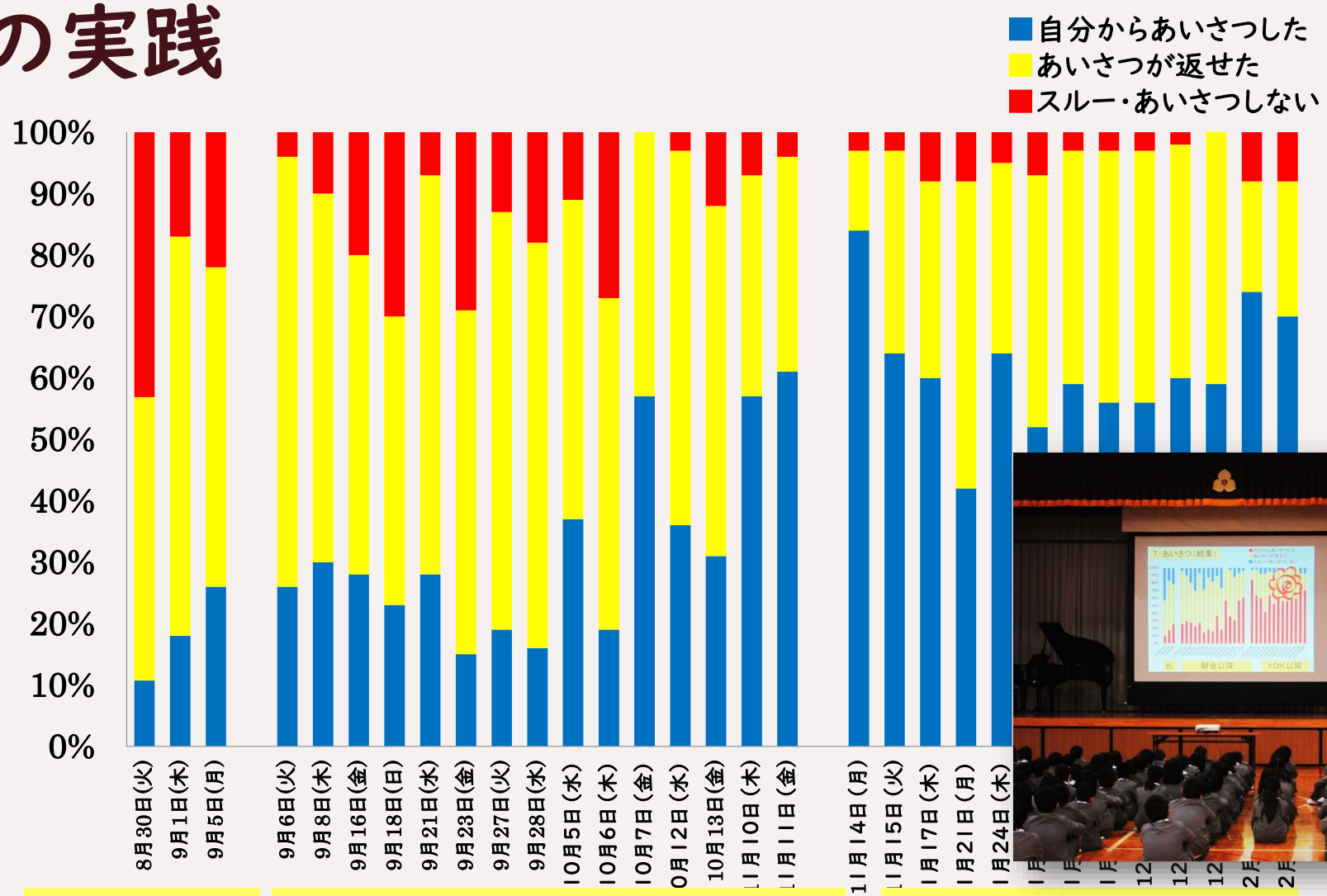
適切な行動を
具体的に決めて
教える

Aの実践

集会での校長先生からの呼びかけ

環境の中に適切な行動を引き出す
手がかりを設定する

Cの実践



指導前

9月5日の朝会以降

11月以降

その他のＣの実践

問題行動発生率の変化 （谷川・庭山, 2023）

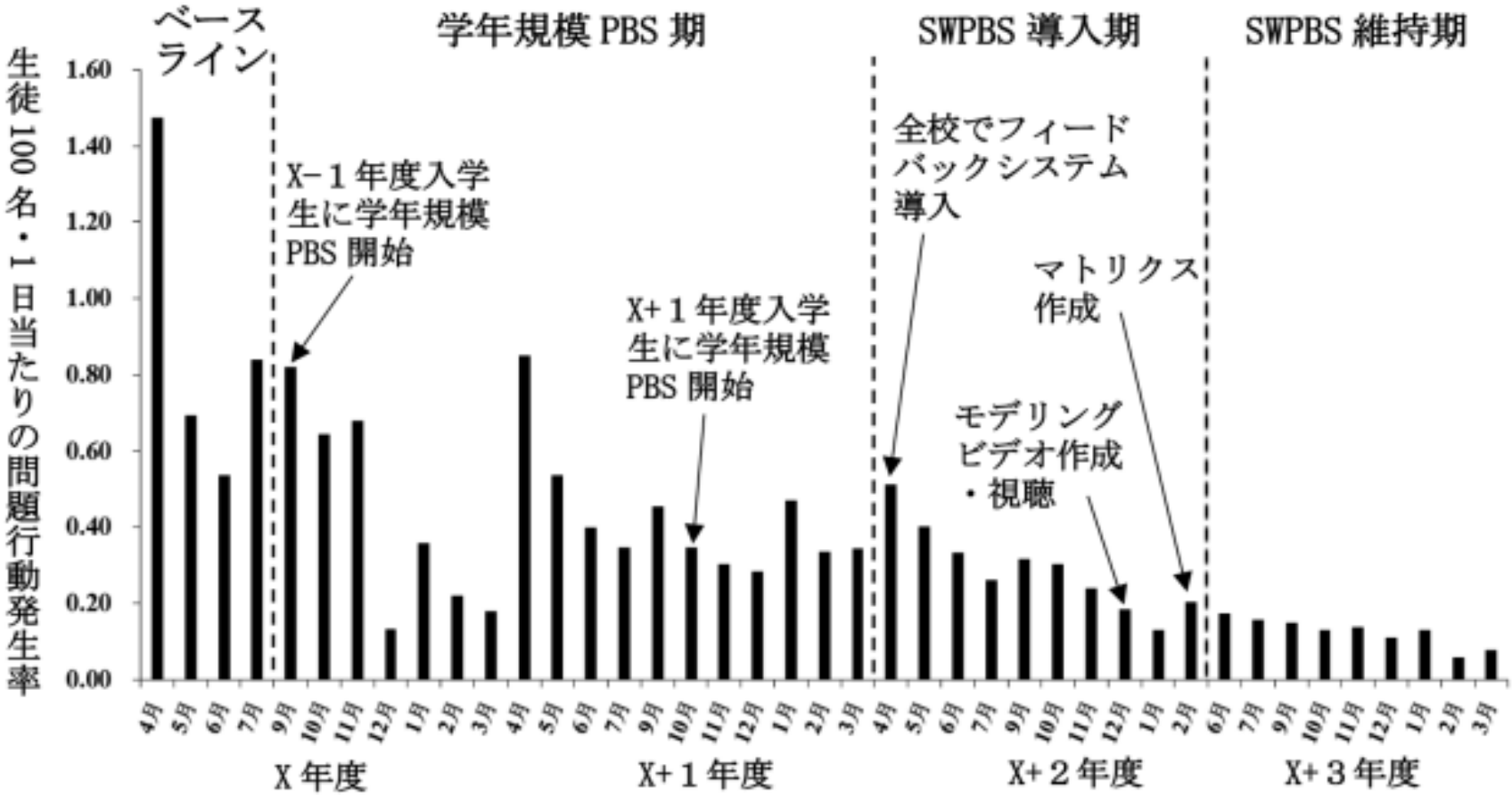


図 1　学校全体の生徒 100 名・1 日当たりの問題行動発生率の推移

注意・叱責１に対して称賛４で対応

重要!

「不適切な行動が起こった場面」への対応

「どう行動すべきだったか」適切な行動を具体的に教える（B）
教えた行動をできるだけすぐにできるような場面を設定する（A）
その行動ができたときにいつもの倍くらい褒める（C）

子どもの「できた」を褒めて終わる

不適切な行動に対応する必要がある場合にもPBS

まとめ

1

教員の暴力（体罰・注意叱責）は強化されやすい

2

厳しい管理型の指導は教育的効果は低く、様々な副作用のリスクもある

3

暴力を禁止する・研修をするだけではこの問題の改善は見込めない

4

暴力を使わない効果的な指導方法にPBSがある

PBSについての情報はこちらご参照下さい

APBS-J

一般社団法人日本ポジティブ行動
支援ネットワーク（APBS-J）HP

pay forward
おくりあい
Positivity

おくりあい Instagram

特別支援まなびの広場
ポジティブな行動支援

徳島県教育委員会HP

ありがとうございました

教育という大人による子どもへの暴力はなぜなくならないのか？

マインド・コントロール研究の立場から

西田公昭

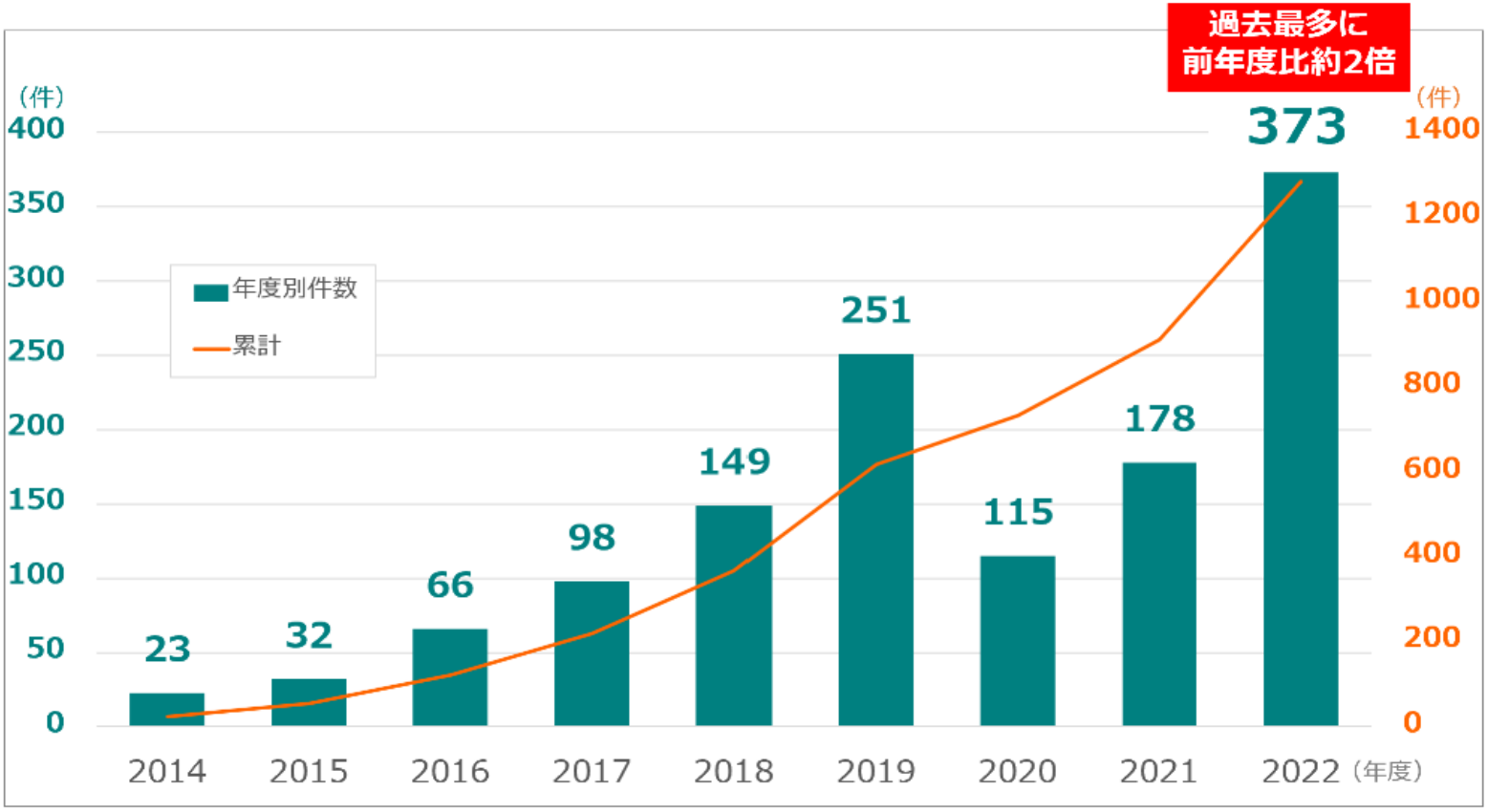
立正大学心理学部

暴力的指導に違和感がなかった世代の価値観が，今も継承されているのか？

『巨人の星』は『週刊少年マガジン』にて1966年19号から1971年3号まで連載

暴力行為等相談窓口への相談件数
日本スポーツ協会（2023）

相談窓口に寄せられる相談のうち、被害者の6割以上が未成年



▲年度別相談件数推移（2022年度末現在）

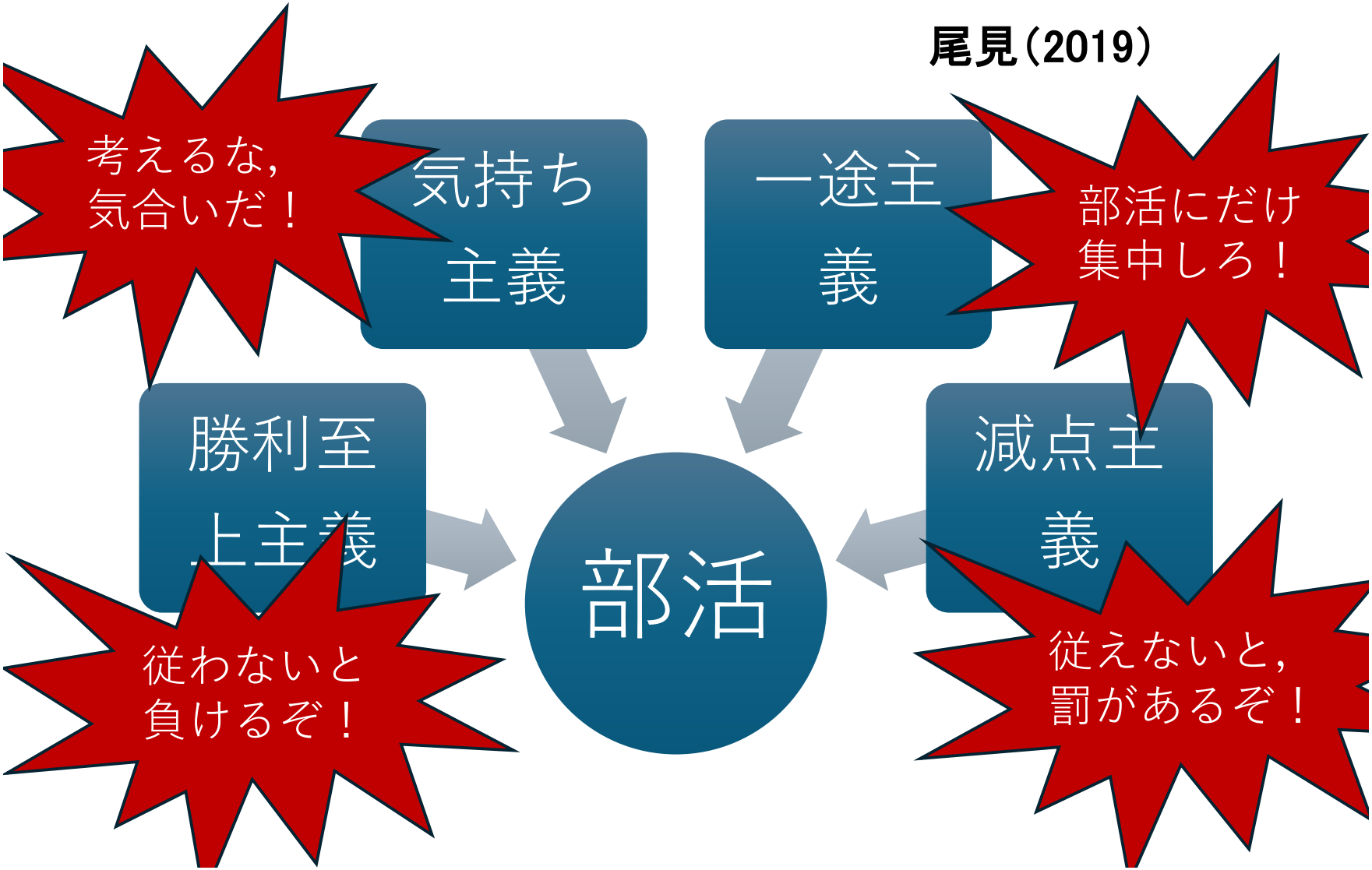
体育会系の部活動における暴力が根強く続いている要因

オトナンサー編集部
アドバイザー：佐藤みのり（さとう・みのり）

- 体育会系の部活動では、暴力を振るいながら指導するやり方が『伝統』
- こうした狭い世界の中では、加害者は暴力を『熱意ある指導』と考え、被害を受ける学生側も『殴られ、蹴られて上達するもの』と受け入れる感覚が一般的だった
- かつて、暴力を受けてきた者が今度は指導者になり、こうした誤った認識を伝え続けるため、今でも暴力が完全になくならないのだろう

“期待される部活動”の構造

尾見（2019）

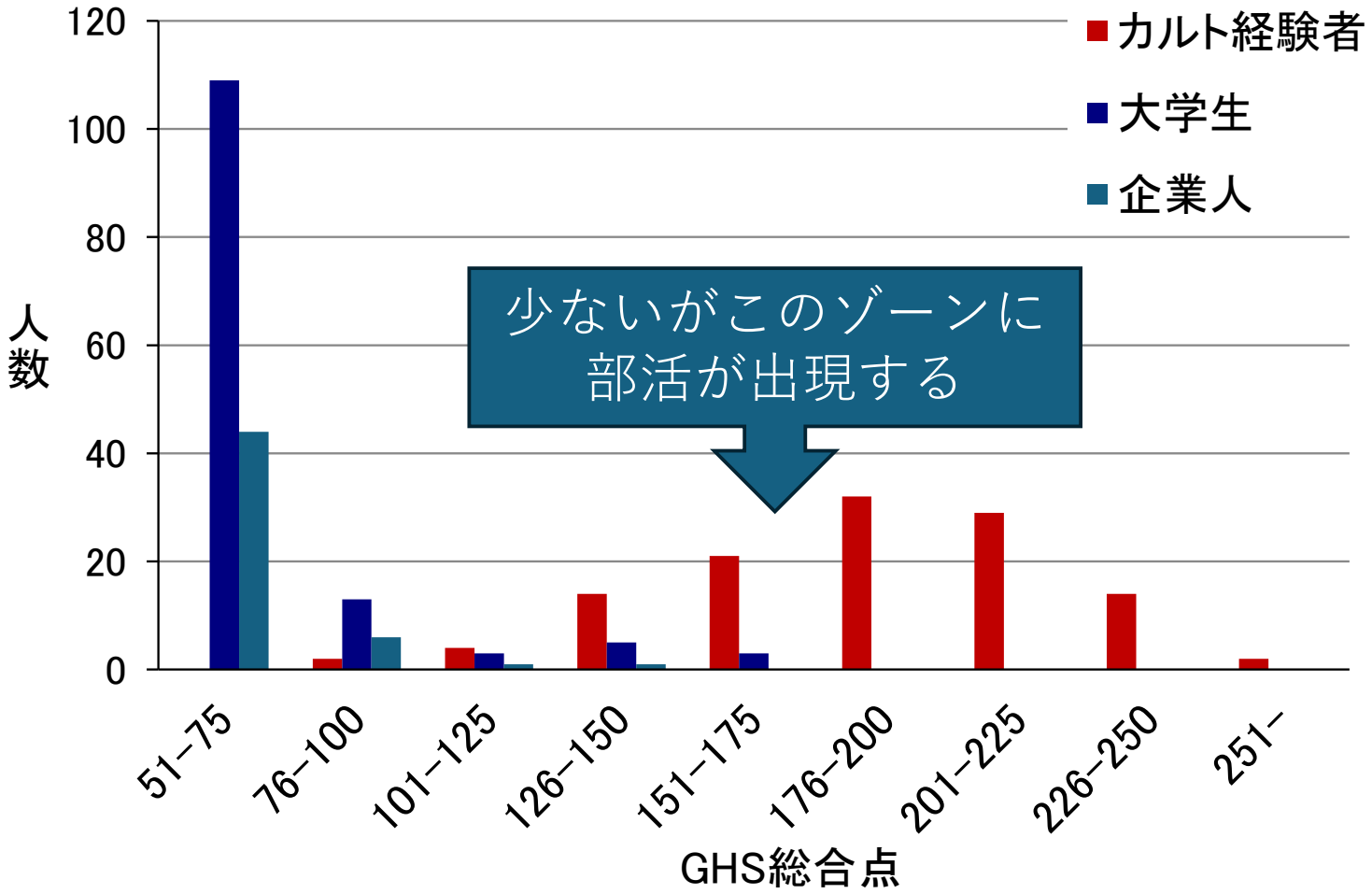


マインド・コントロール状態とは？

- 自己決定権を放棄して支配者の指示に絶対服従することを是とする状態である。
  - 外見上に特徴はないが、以前のその人物像とはまるっきり変わってしまった言動や印象になる。
  - 被害者は自由に考えているように錯覚し、支配を受けていることに自覚がないことが多い。
  - どのような論理的な批判にも耳を傾けないし、批判的な意見には、蔑むように否定してくる

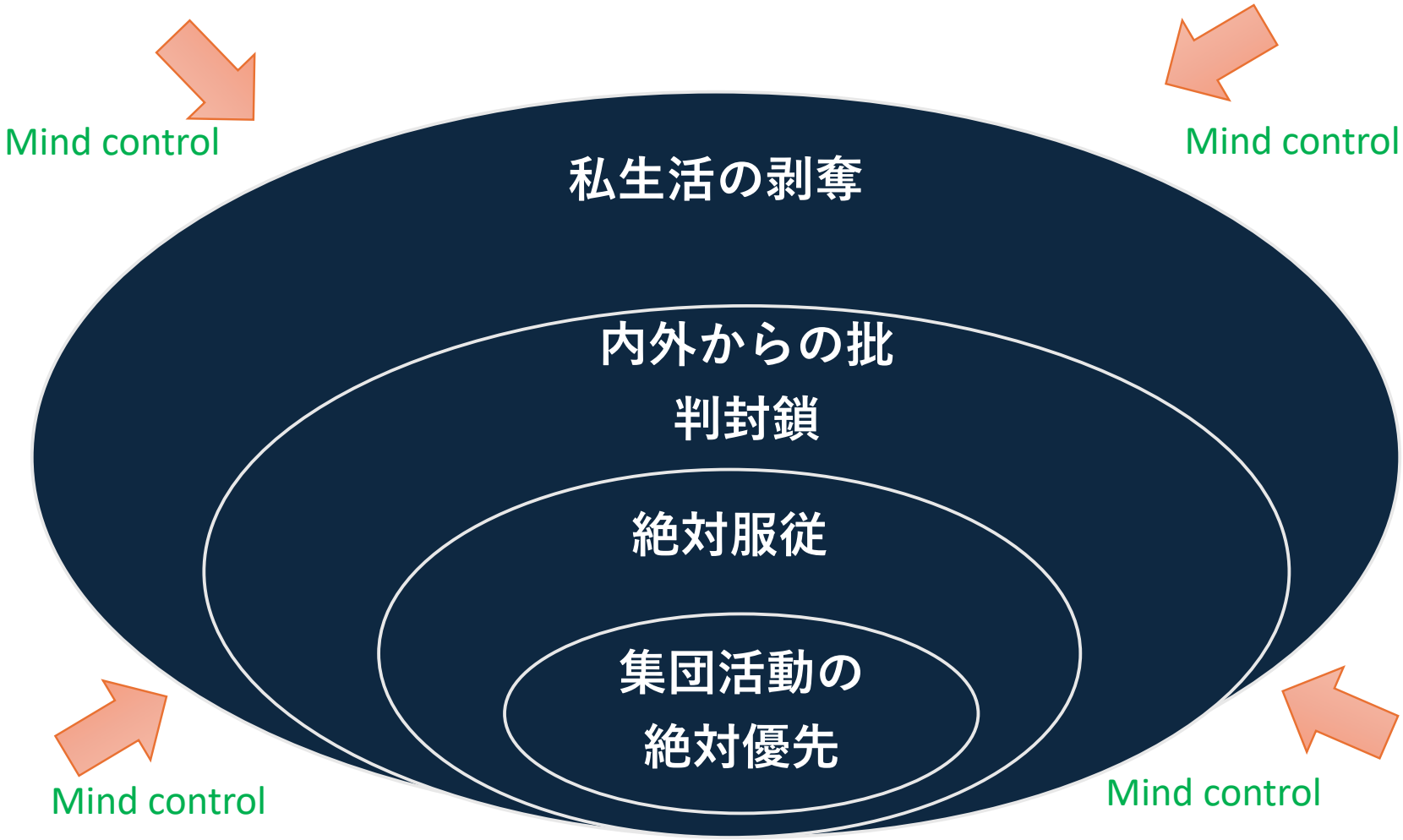
戦前のような全体主義的国家では是認されるかも・・・

GHS総合得点の分布：稀に現れる“部活カルト”



（西田・渡辺・角山・山浦，2009）

カルトに特徴的な4重構造



Copyright © Kimiaki Nishida, Ph. D. , Univ. of Shizuoka All rights reserved

大学生に中高時代を想起させて得た調査回答

- 対象者　静岡県立大学学生176名（中学68人，高校107名）
- 時期　2018年10月19日。
- 実施法　個別自記入形式の質問紙調査

系統	度数	%	累積%
スポーツ系	112	63.6	64.7
音楽・ダンス系	36	20.5	85.5
演劇系	1	0.6	86.1
美術・書道系	7	4.0	90.2
学術・福祉系	7	4.0	94.2
その他	10	5.7	100.0
合計	173	98.3	

- ほぼ毎日活動
- 平日2～4時間休日は3～5時間 活動
- 1年に入部して3年に退部する者が9割

因子名		項目内容	因子負荷量			平均値	標準偏差
			因子1	因子2	因子3		
部活内容の満足度	Q7_2	部活動は楽しかった	**1.00**	-.17	.06	4.18	1.06
	Q7_1	部活動は充実していた	**.95**	-.11	.19	4.16	1.02
	Q7_14	部活動のことは思い出したくない	**-.58**	-.28	.39	3.45	1.18
	Q7_9	部の顧問は好きでなかった	**-.34**	-.12	.17	3.45	1.18
集団に対する魅力	Q7_10	他のメンバーの多くは部に満足していた	-.06	**.87**	-.10	3.47	1.25
	Q7_6	部は集団として結束していた	.22	**.64**	.07	3.65	1.21
	Q7_11	部には誇りとする伝統があった。	-.20	**.61**	.28	3.84	1.22
	Q7_7	部のメンバーに魅力があった	.28	**.61**	-.07	3.69	1.22
	Q7_8	部に所属していることは誇りであった	.32	**.55**	.04	2.55	1.16
	Q7_12	部には卒業した先輩との交流があった	-.03	**.43**	.20	3.49	1.05
部活動の厳しさ	Q7_3	部活動は辛かった	-.11	-.17	**.78**	2.89	1.27
	Q7_4	常に緊張感や集中力が求められた	-.10	.24	**.75**	3.42	1.32
	Q7_5	勝敗や成果にこだわりがあった	.15	.12	**.67**	4.09	1.02
	Q7_13	部活動で自分は成長したと思う	.30	.26	**.39**	1.85	1.03
	1.部活内容の満足度		1.00				
	2.集団に対する魅力		.68	1.00			
	3.部活動の厳しさ		.27	.27	1.00		

累積寄与率=66.3%

調査で確認された暴力的指導の事例

- 自分や他の部員が、顧問に人格的に否定されたり、執拗に罵られたり、侮辱されたりした。
- 顧問は、大声で怒鳴ったり、暴力などで部員を怖がらせていた。
- 顧問に怒鳴られたり、殴られたり、蹴られたりなどの暴力を自分や他の部員が受けた。
- 顧問や先輩の言うとおりにしないと、試合に出してもらえなかった。
- いつも部活で顧問に怒鳴られてばかりいるため、部活の時間以外で顧問の顔を見たり思い出したときでも怖くなった。
- 顧問や先輩からきつくあたられている人がいても自分がそうなるのが怖くてかばえなかった。
- 指導内容に疑義がでていることが顧問に伝わると、その中心人物が探し出され徹底的に叱られた。
- 顧問は、従順でない部員には、脅迫めいた口調で指示していた。
- 部活の成果がよくないと、長時間、執拗に顧問に叱られたり、反省を求められたりした。
- 個人的に秘密にしておきたいことでも顧問には明かさなければならなかった。

マインド・コントロール行為の維持・強化

規制すべき個人の尊厳や他者の人権を踏み躙る心理操作

カリスマ崇拝	権威からの指示への絶対服従や意思の忖度による自己決定権の放棄への誘導
責務・自己犠牲的奉仕	基本的な感情や欲求抑制の義務、罪への代償行為としての経済的破綻の推奨
内外からの批判封鎖	メンバーの言論の自由を否定、外部集団の遮断や批判者への敵対主義（非人間化・悪魔化）による合理的判断の阻害
生理的剥奪	不健康な慢性ストレスによる身体的強度や思考力の低下
集団監視	メンバー間の相互批判推奨して私生活への過度な干渉

退部によって暴力的指導は終わるが・・・
暴力指導システムは是認され次世代に継承される。

「罰」という名の暴力受容

卒業(退部)によって，暴力忍従の終了

・自己非難して罰を正当化

・ノスタルジーとなって肯定的評価

終わり

西田公昭
立正大学心理学部